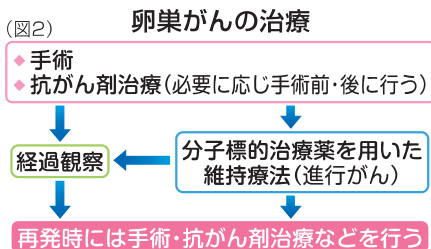
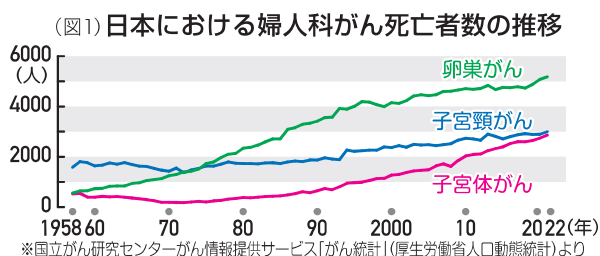


下腹部痛・腹部膨満感・不正性器出血の症状

「卵巣がん」早期診断、治療向上へ

臨床応用される薬剤増加



卵巣がんは超音波断層法・磁気共鳴診断装置(MRI)・コンピュータ断層撮影装置(CT)などによる

卵巣がんは超音波断層法・磁気共鳴診断装置(MRI)・コンピュータ断層撮影装置(CT)などによる

卵巣がんには多くの組織型がありますが、50歳代の罹患率が最も多いため、15〜39歳の若年層に好発する胚細胞がんもありま

す。国内の卵巣がん罹患患者数は増加しており、2020年のデータでは1年間に約1万3000人が卵巣がん

と診断されています(国立がん研究センターがん統計)。死亡者数も増加の一



婦人科准教授 園田 顕三

卵巣は女性の子宮から連続する卵管に接して存在します。卵管・卵巣は左右にそれぞれ1個ずつありま

からだを 読み解く

九州大病院別府病院の治療・研究

▶ 14 ◀

途をたどり、22年には婦人科がんで最多の5200人が卵巣がんで亡くなっています(図1)。卵管・卵巣は骨盤の奥深い場所に位置するため、診断された時には進行し、骨盤内や上腹部などの他部位に病巣が広がっている進行期(ステージ)Ⅱ期以上が57%と報告されています。

卵巣がんは早期診断が困難とされ、超音波や腫瘍マーカー採血によるスクリーニングでも生存期間の延長にはつながらないとされてきました。しかし、昨年の論文では、卵巣がんにも多い漿液性がんという種類は、スクリーニングによる早期診断が増え、治療がスムーズに進むことが報告されました。スクリーニング検査法の開発で、卵巣がんの治療成績が向上することが期待されています。現時点では、下腹部痛・腹部膨満感・不正性器出血などを自覚したら、婦人科受診を考慮していただきたいと思

います。

卵巣がんは超音波断層法・磁気共鳴診断装置(MRI)・コンピュータ断層撮影装置(CT)などによる

画像診断や腫瘍マーカーを参考にして、手術や腹水から取った細胞にがん細胞が含まれていないか検査する腹水細胞診で診断されます。治療としては手術と抗がん剤治療を組み合わせて行い(図2)、進行がんでは、腫瘍細胞増殖や血管新生の抑制を目的とした分子標的治療薬を用いた維持療法も行われます。近年は医学の進歩により、臨床応用される薬剤が増えてきました。

さて、卵巣がんの一部は遺伝的に発生することも知られています。卵巣がんや乳がんの方が親族に多い場合、遺伝性卵巣がんと診断される場合があります。BRCA遺伝子という遺伝子に病的な変化があると、卵巣がんに罹患するリスクが高いことが分かっています。ですが、BRCA遺伝子に病的な変化を持つ全ての方が、がんに罹患するわけではありません。卵巣がんに罹患するリスクを低減する目的で卵管・卵巣を摘出する手術が行われる時代となりました。卵巣がんの診断と治療、遺伝性卵巣がんの診断とリスク低減卵管・卵巣摘出術は専門性の高い領域です。今後の医学的進歩により、安全で効果的な診断・治療法が開発されることが期待されます。